

愛隣館研修センターニュース号外

東日本大震災被災者支援ニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町151 2F TEL 075-621-3849 FAX 075-621-1579

E-mail : airinday@sunny.ocn.ne.jp <http://www.airinkan.net> 振替 01020-5-39321
 編集発行所：社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者：平田 義

東北地方太平洋沖地震・津波（東日本大震災）発生から2ヶ月。現在も尚、断続的な余震、情報の氾濫、原発被害、風評被害等によって、被災された方々がさらなる困難を強いられるというニュースは後を絶ちません。しかし、被災された方に出会い、声を直接・間接的に聴きながら、協力の輪は確実に広がっています。

私どもも、イエス団「東日本救援対策本部」から募金の協力をお願いさせていただきましたところ、多くの方からご協力いただきました。ありがとうございました。そこで、第1次募金期間（3/19～4/30）が一旦終了いたしましたので、今、現在の募金の状況をお知らせさせていただきます。

また、この間、東日本大震災被災者支援の輪に微力ながら協力させていただきました。その活動についても報告させていただきます。

- ①地域住民、自治会、京都文教大学を中心に、向島に避難されてきた被災者への支援活動について
- ②相楽福祉会の呼びかけに応じ、参加した「東日本大震災関西障害者応援連絡会」を通して、宮城県石巻市の「ひたかみ園」での活動報告と参加者の感想
- ③「イエス団東日本大震災救援対策本部」から、今後の法人としての具体的支援内容を模索するために、現地に出向いた報告と参加者の感想

このたび、上記のように、募金の報告とこれまでの活動を特集して、「愛隣館研修センターニュース号外」＝「東日本大震災被災者支援ニュース」として皆さまにお届けすることにいたしました。是非、ご一読下さいますようお願いいたします。

未曾有の大震災発生から2ヶ月が経過いたしました。いまだに、被災された方々は、塗炭の苦しみの日々を強いられています。その痛みを思いを寄せ、私たちにできることを模索し実行していきたいと思えます。今後とも御協力のほどよろしくお願い申し上げます。（平田義）

募金の状況 イエス団救援対策本部 ￥4,502,747 (5/11現在)

以下に、愛隣館関係者から直接法人に送金された方、現金をお持ち下さった方のお名前を感謝をもって掲載させていただきます

郵便振替(法人に送金して下さった方)

南原麻里,清水元介,戸塚菊美,宮本真希子,森田学,織田雪江,横山明子,澤田茂雄,加治木政子,滝口豊,山形滝子,川端佐代子,藤田早紀,泉順吉,富士定夫,甲東教会CS,同志社女子高等学校,杉本基晴,河達二

(19口341,117円)

現金募金(現金を直接お持ち下さった方)

赤保正典,秋山健,上野直子,川尻良雄,北野光晴,北野井一恵,丹羽克吉,林川忠男,平井啓之,

福田光宏,藤田三郎,村田明隆,森大樹,森川登美子,森田学,赤とんぼ(小中謙吾・宮坂亜矢子・寺田知沙・福田竜一),武澤信夫,武澤直子,銅銀正美,中西静子,土井淳平,井桁光,香川さとみ,川西大祐,金真雅,後藤都子,辻早苗,村田幸寛,安野友喜,山本秀夫,横山利明

(31口236,521円)

2011年5月12日現在 敬称略

記入に際しましては万全を期しておりますが万が一記載漏れがありましたらご一報ください。

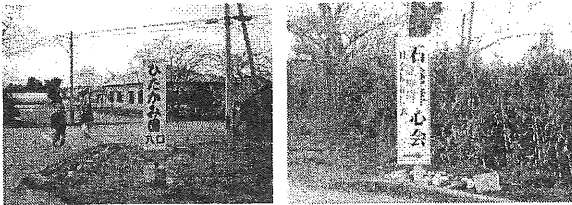
ひたかみ園応援第8陣(4/6-11)

佐藤雅裕

最大余震時、夜勤をさせて頂いていたが、事務所内のストーブも消しにいけないほど立っていらなかった。余震がおさまりストーブを消した途端、停電に。その後、サイレンがなり、津波警報発令の職員の声に緊張が走ったが、真っ先に全身性障がいのKさんの部屋に向かった。車いすがないため(流された?)、担架を用意するから待ってきてくださいと職員に言われたが、廊下は人のバタバタする音が響き、その待つ時間がとても長く感じた。『僕は走れる、でもKさんは一人では動けない、とてつもなく不安だろう』と思い、なるべく不安を軽減できるように声かけをした。その後、職員・ボラで4名ほどが来てくれ、スムーズに担架移動できた。その時のKさんの涙目を忘れない。

また、ひたかみの職員の余震時の冷静な対応には本当に頭が下がり、涙がでそうになった。最終日、入浴介助と一緒にいった職員が「ボランティアさんに来てもらって助かりました」と話してくれた。「とんでもないです。介助を教える負担、短期間で入れ替わるボランティアに、利用者さん・職員さんの負担は計りしれません」と返答するのがいっぱいだった。

介助を主なミッションとした活動だったが、人と人をつなぐ関係性は短期間でも変わらない。ひたかみの皆さんにとって「ボランティア」という単体であればよいと感じた。



↑ ひたかみ園入口看板 ↑

辻早苗

震災後最大の余震に遭遇。水道と電気が止まった中ではあったが、第2ひたかみ園での直接支援は当事者たちの笑顔に支えられる時間となった。一緒に避難されている保護者や職員さんから、地震当時の様子を聴かせていただく中、短期間滞在者である私たちに、つらい体験を話して下さるといふ好意にただただ感謝するばかりだった。

話を伺いながら、多大な困難を被り大きなストレスを抱えながらの集団生活で、個々人の「こだわり」(震災以前はそれが日常であったはずの)を取り戻すことは難しく、職員、保護者、利用者がさらに少しずつストレスを抱えていることに気づかされた。

大きな困難の前に個々人が寄り添い乗り越えようとしていた当初から、新たな人間関係から生じるストレスが、小さなハレーションに結びつきつつある場面もあり、心の泥を出せる場の必要性を強く感じた。しかし一方で、当事者の笑顔がひずみの間を埋めているように感じた。思いっきり笑い合える日が1日も早く来ることを祈り続けたい。

ひたかみ園応援第10陣(4/20-27)

田中仰

重心タイプの障がいのある男性が誤嚥性肺炎で入院されることとなりました。この間、お母さんから、3/11の話を書く機会がありました。「3/11は息子がデイサービスの利用日でもたまたま迎えに行ったときに地震があり、津波が襲って来た。家に戻ろうとしたが、職員に止められた。それから避難生活が始まり、まだ自宅には帰っていない。家は流され、帰っても何も無い。あまりにも酷い。悲惨すぎて涙も出ないのです。」と淡々と語って下さいました。

この話を聞いたとき、どう反応したらよいか、僕は今、何が出来るのかを考えさせられました。地震と津波が襲った人生。やはり、僕はその立場にはなれず、聞くことと、息子さんへの介助方法の仕方ぐらいしか伝えることはできませんでした。しかし、お母さんは真剣に僕の話に耳を傾けてくれていました。

今でも、この日のこと、この日のお母さんの話を思い出すと、無力だった自分とお母さんの顔が浮かび、涙が出そうになります。でも、お母さんは涙を出さずに、今を生きておられたんだと、自分に言い聞かせています。

武田弘明

今回、被災地へ行き、改めて人との関わりがどれほど難しいかを思い知らされた。

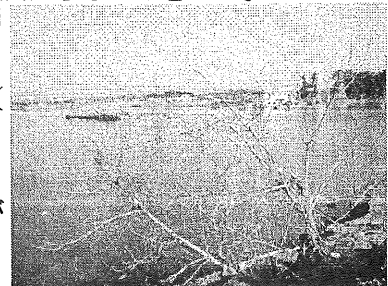
避難所で生活されている方々は様々で、震災を乗り切ろうとされている方もいれば、中にはやはり表情の暗くなってしまう方もいて、その方達に釣られるように周りの人も暗くなる方も多かった。僕も初めての被災地支援ということもあり、つられるように暗くなっていたのではないと思う。

例えスタッフであっても同じ境遇になられた方にはなかなか相談できないことが多い様子で、すぐにでも出来そうなニーズを遠慮して多く抱えておられる家族が多かった。ただ、ボランティアも短い期間しかいない中で信頼を得てはじめて話をしてくださるので、全ての人のニーズに応えることはとても難しいことであった。

避難所の生活の中で日々の楽しみの殆どはテレビであったが、常に被災の情報が流れ、否が応にもその状況にあることを感じずにはいられないという話を聞き、現地の人にとっては休まる日々がないだろうと思った。

現地の家族や子ども達を楽しめる状況でないと楽しい雰囲気も広がらないと思えた。ボランティアとして短い期間しかいられない自分に無力さを感じずにはいられません。

液状化により地盤が沈下している→



法人震災救援対策本部での活動について

東日本大震災直後の3月15日に、「イエス団震災救援対策本部」を立ち上げました。これまで3回の救援対策本部会議を持ちました。そこで、法人としての今後の活動を模索するため、4月10日～14日まで、石巻を拠点に、仙台→大船渡→釜石を訪問いたしました。以下にその報告と参加しました「あいりん」の篠原の感想を掲載いたします。」

石巻→日本基督教団東北教区被災者支援センターの石巻拠点として、石巻栄光教会・栄光幼稚園の場所をお借りし、泥だし、がれき撤去作業のボランティアの受け入れを行っていた。5月の連休明けで、一旦、ここの拠点は活動を停止することになっている

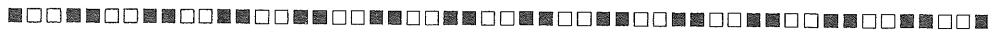
仙台→医療的ケアネットワークで関わりのある、「仙台つどいの家」を訪問。4月7日深夜に起きた余震によって天井が崩落。利用者は別の施設で分散して受け入れている。立入禁止建物の診断を受け、建て替えが必要であるとのこと

→同じく、医療的ケアネットワークで関わりのある拓桃医療センター小児科医師の田中総一郎さんを訪問。震災直後から、避難所や地域で暮らす障がい児・者に対して、必要な物資を届ける支援を続けておられる。この活動に、東北教区被災者支援センターのご紹介で教会員の方も協力されている

→日本基督教団東北教区被災者支援センター「エマオ」訪問。全国からのボランティアを受け入れて、これまでの仙台青年学生センターや教会の活動に繋がりのある方からの支援要請を受け、泥だしやがれき撤去を行っている

大船渡・釜石→日本基督教団大船渡教会、新生釜石教会を訪問。

現地、特に沿岸部の状況は、言葉で言い表すことができないほどの凄惨な被災状況であり、その場に立ちつくすことしかできませんでした。今後、私たちがどのような形で必要とされていくのか、法人として方向性を明らかにしていかなければなりません。具体的な活動が決定しましたら、皆さまにもお知らせをいたします。(平田義)



現地を訪れての感想

篠原文浩

様々な大規模に展開されているボランティア活動の意義はもちろん大きいのですが、大規模支援であるが故に漏れ落ちるものがあり、大規模な支援では決して埋められない「個別の必要性に応じた支援」がそこにあることに気づかされます。

避難所等で避難生活を余儀なくされている方々には上記のような、大規模支援で対応できることも多くありますが、それも避難所によって支援の届き具合に大きな差があります。そして、その中に「個別の支援」が必要な方々もおられるということをお忘れではありません。特に自閉症などの障がいがある方などには、そうした配慮の必要性について現地ラジオ放送などでの呼びかけも行われていますが、混乱した状況のなかで十分な個別の配慮に基づいた支援が行き渡っていないとは言えない状況であることは少しずつ報道されるようになってきたところです。

また、地震発生とその後の津波襲来の時刻は、多くの障がい児者が「通所」「通学」先から自宅へ帰る準備をしている時間でもありました。結果として、通所施設にそのまま退避、あるいは通所先からまとまって避難して一命を取り留めた方々が多くおられます。そうした方々の避難生活は、本来日中活動の機能しかないと24時間通しての支援へと変質しており、通所事業所職員が慣れない夜間支援などに交替で従事し、過度な負担がかかっている現状があります。そうしたところへは、様々な支援者たちのネットワークで直接支援に携わる人材派遣も行われているところですが、まだまだマンパワーは求められています。

ではこれから私たちはこういった事態に備えてどういう支援の展開を準備すればいいのでしょうか？

まずは様々な役割を果たしてくれるマンパワーとし

での支援、つまり現地で具体的に行動できるボランティアが必要です。これは量として、継続的に必要となるものです。それぞれに得意な分野がきっとあることでしょう。その分野に力を発揮してもらって支援者もまた、量的に継続して現地に派遣できる仕組みが必要

です。またそのマンパワーを有効にそして現地スタッフに負担をかけずに送り込めるよう「現地での派遣コーディネーター」としての役割が必要です。あちらこちらの避難所で、また点在する在宅で避難生活を送らざるを得ない(障がいの重さ故に、避難所では生活できない)方々のニーズを把握し、具体的支援と結びつける役割が必要です。コーディネーターに求められる役割は？支援者を有効に配置する？派遣支援者に情報提供する？点在するニーズの把握と支援の展開？現地コーディネーターのサポート？医療チームとの連携と多岐にわたり、そうした人材を少なくとも人口2万人に一人ぐらいの割合で災害時に派遣できる仕組みが今後必要となってくるものと思われ

ます。地元のコーディネーターたちは、紛失した手帳の再交付などの事務手続きに謀殺されることが予想されます。そういう手続き上の業務等は派遣コーディネーターが担い、支援を必要とする方々と普段から顔の見える付き合いをされている地元のコーディネーターに個別支援の調整を中心的に続けてもらうのも一つの考え方で

しょう。いずれにしても「普段と違う状況」だからこそ、「どうすればいいのか？」という相談が激増することが予想されます。また相談する、という発想自体できない状況も想定されます。さらには相談する手段がない、というのは今回の震災でもまた体験したことです。普段人口2.5万人に一人ぐらいの比率で障がい児者の相談支援専門員が配置されていることを考えると、上述のように非常時にはそのコーディネーターが二人になる仕組みはかなり有効に機能するものと考えられます。